

保健室ボランティアにより養成される力量

著者	河田 史宝
雑誌名	教育実践研究 = Studies in practical approaches to education
巻	39
ページ	33-44
発行年	2013-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/36378

保健室ボランティアにより養成される力量

The qualities and competencies of a *yogo* teacher trained by a volunteer at a school health room

河田史宝 (金沢大学人間社会学域学校教育系)

Hitomi KAWATA

Keyword : 保健室、ボランティア、養護教諭特別別科
school health room, volunteer, special course for *yogo* teachers

I はじめに

教育職員養成審議会第3次答申において「養護教諭においては、心身の健康観察、救急処置、保健指導等児童・生徒の健康保持増進について採用当初から実践できる資質能力が必要である。中堅教員の段階である養護教諭については保健室経営の在り方、学校保健の推進等に関して広い視野に立った力量の向上が必要である」¹⁾と、採用当初からの資質能力を示している。また、学校保健活動の中核的活動ができる実践的な指導力も求められている²⁾。さらに、学校現場における諸課題の高度化・複雑化により養成段階における実践的指導力の必要性も示された³⁾。一人職あるいは二人職で勤務することが多い養護教諭は、経験年数に関係なく新規採用時から養護教諭としての判断や対応、指導、連携などの実践力が求められている。4年制大学あるいは短期大学の養成機関では、これらの教育実践力を養成期間を通して培い、さらに最終学年には教職実践演習により基礎を確実なものにしていくことができる。しかし、1年間の養成期間である本学養護教諭特別別科は、教職実践演習が必修化されて位置付けられていない現状がある。そのため、1年間の履修期間において養護教諭養成の質保障に取り組んでいく必要がある。

ボランティアは、保健、福祉、教育など様々な形態により行われている。看護系では、「まちの保健室」ボランティアにより看護師のスキルアップが行われ、意識の変化が確認されている^{4) 5)}。地域の高齢者と1対1のフィジカルアセスメントの体験は、フィジカルアセスメントの技術の習得

や自己の課題を認識し、高齢者に接することにより老年観、死生観を深めていた⁶⁾。教育系では、教育ボランティアは学生にとって子どもの実態を知る機会になるなど有効な経験になっている⁷⁾。さらに、教員養成の大学生時代に高等学校のティーチングアシスタント(以下:TA)を経験した教職一年目の教員はTA経験が授業の信念と教材内容・教授法の知識を教師の力量として形成していた⁸⁾。このように、教育実習だけでなく主体的に実践的にかかわる様々な体験は、学生の技術の習得や対象者の実態把握や理解につながり実践的指導力が育成されるといえる。学校ボランティアに関する先行研究はあるが、保健室ボランティアに関する先行研究はない。

そこで、本研究では保健室ボランティアに参加した養護教諭特別別科の学生の学びについて明らかにし、今後のカリキュラムデザインの基礎資料とすることを目的とした。

II 保健室ボランティアの概要

1 活動の目的

養護教諭の指示のもと活動補助に従事することを通して、学校教育における養護教諭の教育活動を知ることが目的の一つである。次に、そこでの学びから大学で学修する上での問題意識を得ることにある。

2 活動の位置付け

本活動は本学の養護教諭特別別科教育課程外の活動として位置付け、2011年度からは、金沢市及び石川県との連携事業の一環により実施している。

3 希望対象者

養護教諭特別科生のうち、保健室ボランティアを希望する者を対象とする。

4 活動日と受け入れ人数

活動日は、通年の活動を原則とし、前期（4～8月初旬）と後期（10月～2月初旬）の期間を区切りとする。教育課程との関係で活動の曜日は基本的に木曜日・金曜日の午後とするが、曜日・時間は、ボランティア校養護教諭と学生との合意により決定する。受け入れ人数は、学生の希望と保健室ボランティア受け入れ校により調整を行う。

5 学生の指導

学生は、毎回の活動後にWebノート（学校教育学類が導入するボランティア等の活動報告システム）で活動報告し、養護教諭特別科担当教員による指導を受ける。このため、ボランティア校養護教諭にボランティア活動中の指導を除いて、特別に文書等による評価等を依頼はしない。

6 個人情報の保護

ボランティア活動を通して知った個人情報は、守秘することを徹底して指導する。

7 保険の加入

学生は、学研災保険（付帯賠償責任保険）に加入する。

8 交通手段

授業終了後に活動に従事するため、授業時間の関係から公共交通機関の使用が難しい場合、自家用車等での通いを依頼する。自家用車等を使用の場合は、校内への乗り入れには、細心の注意を払うことを学生に指導する。交通費は自己負担である。

9 配属校と人数

ボランティア校の校種は、養護実習と異なる校種を基本的には選択する。また、養護実習は教職に関する科目の実習として評価対象であるが、保健室ボランティアはその目的と異なることから、養護実習校と保健室ボランティア校は兼ねないことにする。このことを事前に学生に説明したのち、学生から希望校種を募集する。2012年度のボランティア校は、小学校は7校（1名配属1校、2名

配属4校、3名配属1校）、中学校は9校（1名配属4校、2名配属5校）、高等学校は3校（1名配属1校、4名配属2校）、特別支援学校は1校6名配属である。小学校はA市立小学校、中学校は、A市立中学校とB附属中学校、高等学校はC県立高等学校、特別支援学校はB附属特別支援学校である。

III 研究方法

1 対象者

調査対象は、2012年度の保健室ボランティア参加者42名（男子0名、女子42名）を対象とした。

2 調査期間

保健室ボランティア終了後の2月16日に配布し、2月26日に回収をした。

3 調査方法

無記名自記式質問紙により行った。

4 調査内容

調査内容は、「保健室ボランティア参加の回数」「保健室ボランティアに参加して良かったか（以下、保健室ボランティアの参加）」「保健室ボランティアは楽しかったか（以下、保健室ボランティアの楽しさ）」「保健室ボランティアによる学びがあったか（以下、保健室ボランティアからの学び）」「保健室ボランティアが講義に役立ったか（以下、講義への役立ち観）」「保健室ボランティアはあなたのものの考え方や見方に影響を与えたか（以下、ものの考え方や見方への影響）」「保健室ボランティアを通して自身の課題を見つけることができたか（以下、自分自身の課題）」である。「保健室ボランティア参加の回数」は実数を記入し、自分自身の課題は、見つけることができたかどうかを尋ね、その内容を自由記述とした。その他は4件法にて回答を求めた。

5 分析方法

データをExcelに入力し、人数と割合を算出した。自由記述の分析にあたっては、記述された内容をなるべく生かす形でコード化し、類似性にしたがってサブカテゴリー、カテゴリーとして分類

した。そのカテゴリーの内容に反映した表現を用いて命名した。サブカテゴリーは〈 〉、カテゴリーは【 】、主なコードは「 」で示した。

6 倫理的配慮 質問紙による調査の実施にあたり、目的と利用についての説明を口頭にて行った。また、質問紙の提出は自由意思によるものであり、提出しないことによる不利益は何ら被らないことを伝えた。結果の分析にあたっては、個人情報特定されないように配慮することを説明した。その上で、了解の得られた学生から提出を受け、質問紙の提出をもって同意とみなした。

IV 結果

1 対象者

保健室ボランティアの参加者 42 名のうち、41 名から回収した（回収率 97.6%、有効回答率 100.0%）。

学生の入学前の経験は表 1 のとおりである。大学を卒業後すぐに養護教諭特別別科に進学した者が 17 名（41.5%）と最も多く、次いで専門養成機関卒業後すぐに養護教諭特別別科に進学した者が 12（29.3%）と多かった。

2 保健室ボランティア回数

ボランティア回数の記載がなかった 1 名を除いて、40 名の分析を行った（表 2）。全体の平均ボランティア回数は 11.4 回、最大回数 25 回、最小回数 3 回であった。

3 保健室ボランティアの参加

保健室ボランティアの参加を、とても良かった 19 名（46.3%）、良かった 22 名（53.7%）、良く

なかった、全く良くなかったは 0 名であった。保健室ボランティアの参加と保健室ボランティアの楽しさ、保健室ボランティアからの学びを表 3 に示した。保健室ボランティアの参加をとっても良かったと答えたものは保健室ボランティアをとっても楽しかったと答えたものが多く、参加を良かったと答えたものは楽しかったと答えたものが多く、有意差が認められた（ $\chi^2=21.328$, $df=2$, $P<0.001$ ）。

表 1 対象者の背景

入学前の経験	人数	(%)
高等学校看護科、専攻科	2	(4.9)
専門養成機関	12	(29.3)
専門養成機関、病院勤務経験	7	(17.1)
大学	17	(41.5)
大学、病院勤務経験	1	(2.4)
短期大学、病院勤務経験	2	(4.9)
合計	41	(100.0)

表 2 校種別ボランティア回数 (n=40)

	平均回数			
	平均回数	標準偏差	最小回数	最大回数
小学校 (n=11)	13.6	5.165	7	25
中学校 (n=14)	12.0	3.700	6	20
高等学校 (n=9)	7.4	3.167	3	12
特別支援学校 (n=6)	12.2	6.274	6	20
合計 (n=40)	11.4	4.862	3	25

表 3 保健室ボランティア参加と楽しさ・学び

		保健室ボランティアの参加		
		良かった 人数 (%)	とても良かった 人数 (%)	合計 人数 (%)
保健室ボランティア の楽しさ	とても楽しかった	1 (4.5)	14 (73.7)	15 (36.6)
	楽しかった	19 (86.4)	5 (26.3)	24 (58.5)
	楽しくなかった	2 (9.1)	0 (0.0)	2 (4.9)
	全く楽しくなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
保健室ボランティア からの学び	多くあった	1 (4.5)	15 (78.9)	16 (39.0)
	あった	19 (86.4)	4 (21.1)	23 (56.1)
	少しあった	2 (9.1)	0 (0.0)	2 (4.9)
	全くなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	合計	22 (100.0)	19 (100.0)	41 (100.0)

保健室ボランティアの参加がとても良かったと答えたものは保健室ボランティアからの学びが多くあったと答え、良かったと答えたものは学びがあったと答えたものが多く、有意差が認められた ($\chi^2=23.941$, $df=2$, $P<0.001$)。

4 講義への役立ち観

保健室ボランティアで学んだことや気付いたことが講義に役立った12名(29.3%)、どちらかというと役立った23名(56.1%)、どちらかというと役立たなかった6名(14.6%)であった。講義への活用と講義内容との関連づけを図1に示した。講義への活用では、前期後期ともに活用したと複数回答したものが9名(22.0%)、後期の講義への活用が14名(34.1%)であり、後期の講

義への活用が前期に比べて多かった。講義内容との関連づけでは、前期後期ともに活用したと複数回答したものが9名(22.0%)、後期の講義との関連づけが15名(36.6%)であり、後期の講義への内容の関連づけが前期に比べて多かった。

講義への役立ち観と講義への活用、講義内容との関連づけを表4に示した。講義への役立ち観と講義への活用では、有意差は認められなかった ($\chi^2=8.500$, $df=6$, $P=0.204$)。講義への役立ち観と講義内容との関連づけでは、どちらかというと役立たなかったと答えたものは講義内容との関連づけがないと答えたものが多く、役立ったと答えたものは後期の講義と、前期後期の講義との関連づけを答えたものが多く有意差が認められた ($\chi^2=14.377$, $df=6$, $P=0.026$)。

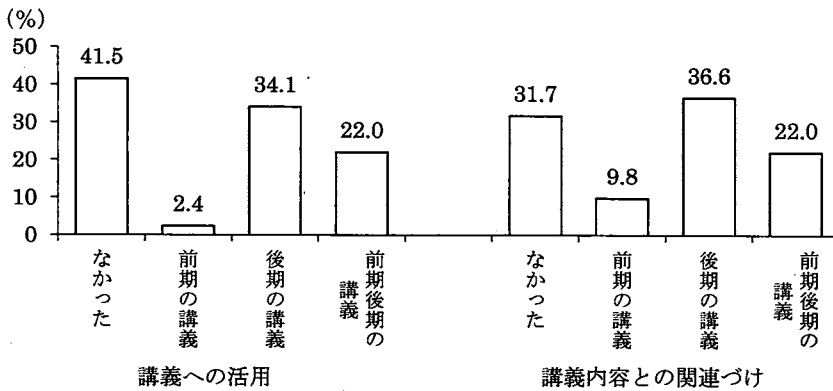


図1 講義への活用と講義内容との関連づけ

表4 講義への役立ち観と講義への活用・講義内容との関連づけ

		講義への役立ち観				
		役立たなかった	どちらかという と役立たなかった	どちらかという と役立った	役立った	合計
		人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
講義への 活用	なかった	0 (0.0)	5 (83.3)	9 (39.1)	3 (25.0)	17 (41.5)
	前期の講義	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.3)	0 (0.0)	1 (2.4)
	後期の講義	0 (0.0)	1 (16.7)	9 (39.1)	4 (33.3)	14 (34.1)
	前期後期の講義	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (17.4)	5 (41.7)	9 (22.0)
	合計	0 (0.0)	6 (100.0)	23 (100.0)	12 (100.0)	41 (100.0)
講義内容 との関連 づけ	なかった	0 (0.0)	4 (66.7)	9 (39.1)	0 (0.0)	13 (31.7) *
	前期の講義	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (13.0)	1 (8.3)	4 (9.8)
	後期の講義	0 (0.0)	1 (16.7)	9 (39.1)	5 (41.7)	15 (36.6)
	前期後期の講義	0 (0.0)	1 (16.7)	2 (8.7)	6 (50.0)	9 (22.0)
	合計	0 (0.0)	6 (100.0)	23 (100.0)	12 (100.0)	41 (100.0)

* : $P<0.05$

5 保健室ボランティア参加と役立ち観

保健室ボランティア参加と役立ち観、活用、関連づけを表5に示した。保健室ボランティア参加を良かったと答えたものはどちらかというと役立った14名(63.6%)が最も多く、次いでどちらかというと役立たなかった5名(22.7%)であった。とても良かったと答えたものはどちらかというと役立った9名(47.4%)、役立った9名(47.4%)であった。保健室ボランティア参加をととても良かったと答えたものは良かったと答えたものより講義に役立ったと答えたものが多く、どちらかというと役立たなかったと答えたもの

が少なく有意差が認められた($\chi^2=6.529, df=2, P=0.037$)。講義への活用では、ボランティアの参加を良かったと答えたものは、活用しなかった10名(45.5%)が最も多く、とても良かったと答えたものは後期講義への活用8名(42.1%)が最も多く示されたが有意差は認められなかった($\chi^2=1.716, df=3, P=0.633$)。講義内容との関連づけでは、ボランティアの参加を良かったと答えたものは、関連づけなかった11名(50.0%)が最も多く、とても良かったと答えたものは後期講義への関連づけ10名(52.6%)が最も多く有意差が認められた($\chi^2=9.730, df=3, P=0.021$)。

表5 保健室ボランティア参加と講義への役立ち観、活用、関連付け

		保健室ボランティアの参加		
		良かった 人数 (%)	とても良かった 人数 (%)	合計 人数 (%)
講義への役立ち観	役立たなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	どちらかという と役立たなかった	5 (22.7)	1 (5.3)	6 (14.6) *
	どちらかという と役立った	14 (63.6)	9 (47.4)	23 (56.1)
	役立った	3 (13.6)	9 (47.4)	12 (29.3)
	合計	22 (100.0)	19 (100.0)	41 (100.0)
講義への活用	活用しなかった	10 (45.5)	7 (36.8)	17 (41.5)
	前期の講義	1 (4.5)	0 (0.0)	1 (2.4)
	後期の講義	6 (27.3)	8 (42.1)	14 (34.1)
	前期後期の講義	5 (22.7)	4 (21.1)	9 (22.0)
	合計	22 (100.0)	19 (100.0)	41 (100.0)
講義内容との関連 づけ	関連付けなかった	11 (50.0)	2 (10.5)	13 (31.7) *
	前期の講義	3 (13.6)	1 (5.3)	4 (9.8)
	後期の講義	5 (22.7)	10 (52.6)	15 (36.6)
	前期後期の講義	3 (13.6)	6 (31.6)	9 (22.0)
	合計	22 (100.0)	19 (100.0)	41 (100.0)

*:p<0.05

6 ものの考え方や見方への影響

ものの考え方や見方に影響を与えたと答えたものは18(43.9%)、どちらかというを与えた22名(53.7%)、どちらかというと与えていない1名(2.4%)、与えていないは0名(0.0%)であった。保健室ボランティアにより影響を受けたも

のの考え方や見方を項目別に示した(図2)。子どもへの言葉かけが31名(75.6%)と最も多く、次いで養護教諭観28名(68.3%)、子ども観26名(63.4%)、保健室の在り方25名(61.0%)であった。教材観7名(17.1%)は最も少なかった。

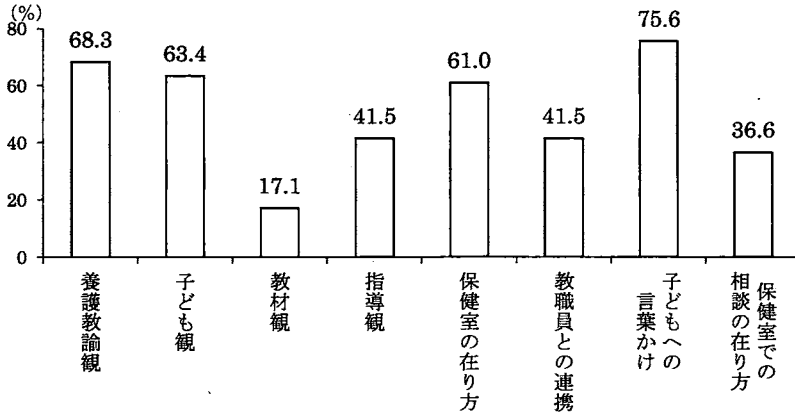


図2 保健室ボランティアにより影響を受けたものの考え方や見方

保健室ボランティア参加とものの考え方や見方への影響を図3に示した。参加して良かったと答えたものはどちらかというと与えていると答えたものが14名(63.6%)と最も多く、参加してとても良かったものは影響を与えたと答えたものが11(57.9%)と最も多かったが、有意差は認められなかった。保健室ボランティアの参加とものの考え方や見方への影響を項目別に示した

(図4)。教職員との連携では保健室ボランティアの参加を良かったと答えたものの割合が高く、その他の項目は保健室ボランティアの参加をとっても良かったと答えたものの割合が高く、養護教諭観において有意差が示された ($\chi^2=4.143$, $df=1$, $P=0.042$)。子どもへの言葉かけは、保健室ボランティアの参加を良かった、とても良かったと答えたものいずれも高い値であった。

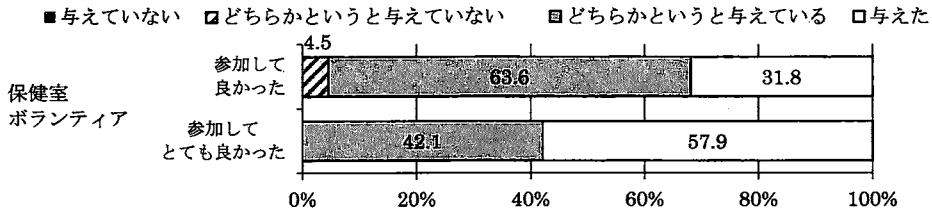


図3 保健室ボランティアの参加とものの考え方や見方への影響

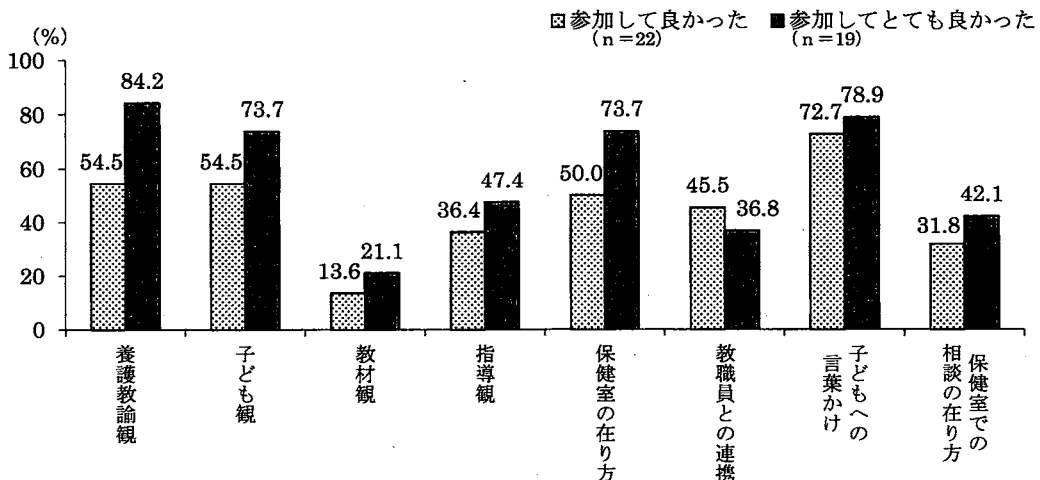


図4 保健室ボランティアの参加と考え方や見方への影響 (項目別)

7 自分自身の課題

保健室ボランティアをとおして自分自身の課題を見つけることができたのは36名(87.8%)、できなかったのは5名(12.2%)であった。自分自身の課題を見つけることができた36名のうち、課題について記載していない1名を除いて35名の記述内容を分析した。その結果、54コードから【専門的知識や技術をつける】【子どもや職員とのコミュニケーション能力を養う】【子どもへのタイミングの良いかかわりと対応をする】【子どもに責任ある指導をする】【スピーディーな連携や協力ができる】【総合的にとらえる視点を養う】【豊かなアイデア力を持つ】【柔軟な考え方や視点を持つ】【行動力と体力をつける】の9カテゴリーが抽出された(表6)。**【専門的知識や技術をつける】**は、<救急処置に関する知識や技術><正確な知識><アセスメント>の3カテゴリーからなり、<救急処置に関する知識や技術>では「救急処置に関する知識不足」「救急処置のしかた対応がまだまだ未熟」「救急処置の迅速さと適切さ」「緊急時や突然のけがなどにあせってしまう」など救急処置に関する知識や技術不足を課題にあげていた。**【子どもや職員とのコミュニケーション能力を養う】**は、<コミュニケーション力の向上><子ども、職員とのコミュニケーション力>の2サブカテゴリーからなり、<子ども、職員とのコミュニケーション力>では「子ども、職員、保護者等との人間関係を築くためにコミュニケーション能力を養う」「一人一人を受け止めるために日々のコミュニケーションを大切にする」など人間関係を円滑にするコミュニケーションを課題にあげていた。**【子どもへのタイミングの良いかかわりと対応をする】**は、<子どもへのタイミングの良い接し方><子どもの甘えや悩んでいる状態への対応><子どもの立場や同じ目線で考える><子どもに興味をもって接する>の4サブカテゴリーからなった。<子どもへのタイミングの良い接し方>は「子どもと接する時の待ちの姿勢とタイミングよく言葉を適切にかけ」「子どもへの接し方(言葉づかい、目線など)」、

<子どもの甘えや悩んでいる状態への対応>は「子どもたちが甘えてきたときの対応」「精神的に悩んでいる生徒にうまく声をかける」などタイミング良く声をかけ子どもの甘えにも適切に対応することをあげていた。<子供の立場や同じ目線で考える>は「子どもと同じ立場(年齢、性別、環境)などに立つ」「生徒の目線で一緒に考える」、<子どもに興味をもって接する>は「子どもにどれほど興味をもって接することができるか」「積極的に子どもたちにかかわっていく」など養護教諭としての子どもへのかかわり方を課題にあげていた。**【子どもに責任ある指導をする】**は、<責任の持てる指導><子どもに対する生活指導>の2サブカテゴリーからなり、<責任の持てる指導>は「自分が発する言葉に責任を持つ」「理解納得してもらえるような言葉かけ」「自分の感情コントロール」「叱り方や声のかけ方」など自身の言葉と感情を課題にあげ、<子どもに対する生活指導>は「勇気を持って子どもを怒る」「服装などの生活指導をする」など、生活指導を適切に行うことを課題にあげていた。**【スピーディーに連携や協力ができる】**は、<スピーディーな連携><うまい協力依頼の仕方>の2サブカテゴリーからなり、<スピーディーな連携>は「連携はスピーディーに行う(情報共有は早いほうがよい)」、<うまい協力依頼の仕方>は「うまく他人に協力を依頼する」を課題にあげていた。**【総合的にとらえる視点を養う】**は、<総合的に冷静に判断する><広い視点からとらえる>の2サブカテゴリーからなり、<総合的に冷静に判断する>は「物事を総合的に判断することができないと思った」などから課題をとらえ、<広い視点からとらえる>は「身体状況、精神状況、クラスの背景などを総合的にみる視点を養いたい」「様々な視点から考える」などから課題をとらえていた。**【豊かなアイデア力】**は<子どもをひきつけるアイデア>、**【柔軟な考え方や視点を持つ】**は<柔軟な考え方や視点を持つ>、**【行動力と体力をつける】**は<行動力と体力をつける>のカテゴリーから自分自身の課題をとらえていた。

表5 保健室ボランティアをとおして考えた自分自身の課題 (n=54)

カテゴリー	コアカテゴリー	主なコード
専門的知識や技術をつける (12)	救急処置に関する知識や技術 (5) 正確な知識 (4) アセスメント (3)	救急処置に関する知識不足、救急処置のしかたや対応がまだまだ未熟、救急処置の迅速さと適切さ、緊急時や突然のけがなどにあわせてしまう 正確な知識を持ち頼れる大人になること、専門的な知識の少なさ、豊富な知識を持つ アセスメントする観察力、子どもたちの実態把握
子どもや職員とのコミュニケーション能力を養う (10)	コミュニケーション力の向上 (7) 子ども、職員とのコミュニケーション力 (3)	コミュニケーションを円滑にする、コミュニケーション能力、コミュニケーション力の向上、コミュニケーション技法 子ども、職員、保護者等との人間関係を築くためにコミュニケーション能力を養う、一人一人を受け止めるために日々のコミュニケーションを大切にする
子どもへのタイミングの良いかかわりと対応をする (10)	子どもへのタイミングの良い接し方 (4) 子どもの甘えや悩んでいる状態への対応 (4) 子どもの立場や同じ目線で考える (2) 子どもに興味をもって接する (2)	子どもと接する時の待ちの姿勢とタイミングよく言葉を適切にかける、子どもへの接し方(言葉づかい、視線など) 子どもたちが甘えてきたときの対応、入室した子どもへの対応を迷わず判断する先生を見て私もそんなふうになれるように頑張りたい、精神的に悩んでいる生徒にうまく声をかける、特別な支援が必要な子どもへの配慮や接し方 子どもと同じ立場(年齢、性別、環境)などに立つ、生徒の目線で一緒に考える 子どもにどれほど興味をもって接することができるか、積極的に子どもたちにかかわっていく、何かしらの反応や結果を焦らない
子どもに責任ある指導をする (8)	責任の持てる指導 (6) 子どもに対する生活指導 (2)	自分が発する言葉に責任を持つ、理解納得してもらえような言葉かけ、考えの甘さ、自分の感情コントロール、叱り方や声のかけ方 勇気を持って子どもを怒る、服装などの生活指導をする
スピーディーな連携や協力ができる (4)	スピーディーな連携 (2) うまく協力依頼の仕方 (2)	連携はスピーディーに行う(情報共有は早いほうがよい)、他教員との連携 うまく他人に協力を依頼する、協力の仕方
総合的にとらえる視点を養う (4)	総合的に冷静に判断する (2) 広い視点からとらえる (2)	子どもへのかかわりを通して判断し、冷静に対応していく力が今後の課題である、物事を総合的に判断することができないと思った 身体状況、精神状況、クラスの背景などを総合的にみる視点を養いたい、さまざまな視点から考える
豊かなアイデア力を持つ (2)	子どもをひきつけるアイデア (2)	アイデア力、保健室の掲示物作成のための子どもたちをひきつけるアイデア
柔軟な考え方や視点を持つ (2)	柔軟な考え方や視点を持つ (2)	もっと柔軟な考え方や視点、一つの目標に対してそれをすぐに実行できるようにしなければと考えてしまうこと
行動力と体力をつける (2)	行動力と体力をつける (2)	行動力、体力がない

()の数字はカテゴリー数

8 保健室ボランティアからの記録

保健室ボランティアの記録から、校種別に児童生徒との関わりや養護教諭に関する記述を整理した(下線は筆者加筆)。

小学校1:保健室ボランティアの時間が14時からということもあり、児童と直接かかわる機会は少ないが、養護教諭の対応をみて児童を尊重し、できる部分を増やしていく養護教諭の教育的な対応を実際にみることができ

た。例えば、休養を終えた児童に対して毛布をたためるか確認し、難しいようなら一緒に畳んでいた。当初高等学校にしか興味がなかったが、保健室ボランティアを通して小学校の保健室経営、養護教諭の魅力を感じた。実習だけでなく定期的なボランティアで処置の方法等の技術を学べると考えていたが、それ以上に小学校という校種の特徴やボランティア校の特徴とそれに合わせた養護活動を学ぶことができた。

小学校2：小学校4年生に対する性教育の見学やサブとしてワークシートを配ったりした。久しぶりに授業の見学ができ、子どもの反応も新鮮だった。また、ワークシートを書く時に、子どもたちから質問が思い浮かばないという意見が出たとき、担任の先生が少し話を振り返り、先生が疑問に思ったことを話すことで、子どもたちから次々と質問が出てきたのですごく感じました。

小学校3：保健室ボランティアを通して、養護実習では体験できなかった養護教諭の事務的作業に係ることができた。作業を通して、養護教諭の仕事は責任のある仕事であること、また、養護教諭は忙しいそぶりをせずに多くの業務をこなす縁の下の力持ち的な存在であることを知った。子どもたちに触れ合う機会は多くなかったが、特別支援学級児童に対して絵本の読み聞かせをさせていただいたことがある。初めは緊張してどう読んでいいのかわからなかったが擬音語のところで、何度も笑ってくれたのでうれしくなって何度も読んだ。やはり理論だけではなく子どもへの接し方は、多くの子どもと出合って学んでいくものだと感じた。養護教諭の先生の子どもたちへの接し方や言葉かけは多く学ぶべき点があった。

小学校4：数名児童が保健室に来室しました。体調不良、体育で足が痛くなったなど様々でした。それぞれの児童に対して、問診や入室時の表情、態度、来室状況から優先度を判断し、ベッドに誘導したり、もう1時間頑張るように促したりしていました。短い時間でしたが、養護教諭は瞬時に多くのことを観察し、児童に対処していかなければならないと感じました。

小学校5：保健室ボランティアは養護実習とは違い、数か月にわたって児童をみることができる良い経験となった。私自身は支援に対してすぐに結果を求めがちになる傾向にあるが、保健室登校児童、発達障害のある児童に対しては状態が維持できていること自体も評価すべきことであることが分かり、視点を新たに持つことができるようになった。保健室登校児童の中には、早い段階でクラスへ復帰する児童や長期的にかかわる児童もいることも分かった。また、学校で一人一人の児童に対する教育方針(計画)がどのように決められているのかも知ることができ、とても貴重な体験となった。

中学校1：保健室ボランティアで学べたことは、いかに養護教諭には行動力が必要であるか、たくさんの情報を

得る、提供する役割であるかということです。D中の先生は本当にたくさん動いていて、良く職員室に行きます。あと、廊下を通る先生をチェックしています。理由はどちらも同じで、自分の得た気になる子どもの情報や先生方の耳に入れておきたいこと、確認しておきたいことを自分で動いて拾い発信していくためです。逆に養護教諭を尋ねて保健室に先生方が来ることもあります。本当に「連携」ってこんな形をいうのではないかとわたしは実感しました。とにかくたくさん生徒だけでなく先生方もコミュニケーションをとっていくことが重要だと学びました。

中学校2：今回の保健室ボランティアでは、中学校に行かせてもらい小学校との違いについて学ぶことができました。小学校はけがで保健室への来室が多かったのですが、中学校では気分が悪い、頭が痛い、おなか痛といった内容で来室する生徒が多いと感じました。養護教諭は会話の中から生徒の訴えの原因を考察しなければならないことを学びました。そのためには、自分のコミュニケーション能力を高め、多くの子どもたちと関わる必要があると感じました。

中学校3：生徒とのかかわりで印象に残ることを言った生徒がいました。女子生徒だったのですが話しているとき「保健室は落ち着く」というようなことを言いました。その時にこの子にとっては、「保健室が居場所であるのだ」と思いました。講義などで、保健室の役割として居場所としている子どもたちがいることはなんとなくわかってはいましたが、実際にその言葉を聞いた時に改めて実感することができました。ただの救急処置の場ではなく、子どもにとってはそれだけではないことが分かりました。保健室ボランティアに行き、養護教諭の生徒へのかかわりや対応の仕方など様々なことを学ぶことができました。養護教諭と生徒のかかわりを見ていて、信頼されていると思うと同時に、怒るときにはしっかり怒っているところがその信頼にもつながっているのだと思いました。様々な学びができ、とても充実したボランティアであったと思います。

中学校4：生徒との会話から、中学生という時期はとにかく周りの目、自分は他人にどのようにみられて思われているかが気になって仕方のない時期であることを改めて実感しました。周りの目も大事だけれどそれよりも将来に向かって進路を自分で決め始める中学生という時期こそ、自分はこれから何をしていきたいのか、大事にしたい

もの、まだ自分らしさとは何かなど、自分自身をもっと見つめることができるような支援を養護教諭として行っていくことが重要だとこのエピソードを通し実感しました。

高等学校 1：養護教諭の保健室に来室した生徒への対応をみて服装や身だしなみなど生徒指導に関するような内容についても、健康面から指導していくことが大切だとわかった。保健室に来室した生徒に養護教諭は、「なぜこうなったと思う?」「あきらめないでなぜなのかを考えないと」と生徒の今後を考えてセルフコントロールできるように考えさせていた。ただ、こちらが対応するのが優しさなのではなく、自分でできるように支援していくことが本当の優しさだと思った。

高等学校 2：掃除監督では、ロッカーのそうじやごみの分別の掃除監督をしました。中には掃除をあまりしてくれない子やホウキで遊び適当に掃除をしている子がいました。先生にはそういう子がいたら注意するように言われていましたが、注意したらなんていわれるのだろうと少し怖くなりしっかり注意をできませんでした。保健室ボランティアを通して自分自身の課題も見えてきた気がします。

高等学校 3：掃除の指導では、こちらが言った言葉は無視され遊び出してしまうこともあり。正直イライラしてしまうこともあり、その時にどのように対応したのがよかったのか、自分の感情をどのようにコントロールするかも考えさせられました。このボランティアを通して高校生は自己主張が強いため、その生徒自身が納得してもらうように説明の仕方、声掛けなどが大切だと感じ、私自身が感情のコントロールができないことがあったため、コントロールできるようにしたいと思いました

V 考察

学生の保健室ボランティア回数は、3回から25回と様々であった。保健室ボランティアの希望校種は養護実習と異なる校種を選択することを基本としている。養護実習では高等学校配属が3名であり、その他は小学校、中学校へ配属される。そのため、養護実習で小学校、中学校に配属された学生の希望が高等学校に集まったものと考えられる。高等学校の配属人数が1校に4名となったことから、4名の学生がローテーションを組みボランティアに参加したため、高等学校では一人

あたりのボランティア回数が少なくなっていた。

保健室ボランティアの参加者は、養護教諭を目指す学生である。そのため、保健室で養護教諭の指示のもと活動補助を行う目的の他に、「活動補助をしながら何かを学ぶ」という姿勢がある。そのようなことから活動補助をするとともに養護教諭から学ぶ、双方向の目的を持っている。学生は、保健室ボランティアの参加を良かった、とても良かったととらえていた。参加をとっても良かったととらえている学生の方が、保健室ボランティアをとっても楽しくとらえ、学びが多くあったととらえていた。子どもとの対応に初めは戸惑ってしまうが、自分の行った行為に対して「何度も笑ってくれたのでうれしくなって何度も読んだ」(小学校3)のように、子どもと接し、その時の子どもの反応が嬉しくてさらにかかわって学んでいく学生の姿からも、参加して良かったこと、楽しいととらえること、学びが多くあったことが関連しているものと考えられる。養護実習は9月の4週間に集中して行うが、保健室ボランティアは週1回くらいの割合で定期的に学校を訪問する。養護実習では、4週間の児童生徒の様子を短期集中的に観察することができる。一方、保健室ボランティアは週1回ではあるが数か月の変化を観察することができる。また、養護実習としてプログラムされていない日常の観察ができる。そのため、長い期間にわたって子どもをみることから新たな視点に気付くこともできる(小学校5)。養護実習においても多くのことを学ぶが、この日常の観察における学びが多かったことが考えられる。その内容は、児童を尊重する養護教諭の教育的な対応(小学校1)、子どもたちへの接し方や言葉かけ(小学校3)、瞬時に行う観察(小学校4)、養護教諭の行動力(中学校1)などの気付きとして表れていた。さらに、その気付きや学びは、子どもへの言葉かけ、養護教諭観、子ども観、保健室の在り方などの学生のものの方や見方に影響を与えていたと推察される。養護教諭が養護実践を行う際には、これらのものの方や考え方が養護実践を左右するため、養護教諭としての資質能

力の基盤として必要であり重要である⁹⁾。保健室ボランティアをとおして、学生は養護教諭として必要な養護教諭観、子ども観などの見方や考え方を学び、健康実態や健康課題の把握、支援の方法、保健室経営など養護実践を行うために必要な基礎を学んでいた。

学生は保健室ボランティアに参加し子どもとの関わりを通し省察するとともに自分自身の課題をとらえていた。子どもとの関わりの中から、注意ができなかった自分への気づき、自身の感情コントロールへの気づきなどから、【子どもに責任ある指導をする】<子どもに対する生活指導>が今後の課題としてあがってきたと考えられた。養護教諭志望学生の養護教諭に対するイメージは「優しい」「受容」「母」などがあり¹⁰⁾、生活指導や怒ることはイメージの中にはなかったと考えられる。しかし、保健室での養護教諭の関わりから、怒るときにはしっかり怒っているところが信頼にもつながっている（中学校3）ことを体験し、養護教諭にも必要に応じて「勇気をもって子どもを怒る」ことが大切なことを学んでいた。学生たちは入学前には病院実習を体験しているが、病院実習での子どもとの関わりは、学校で生活している子どもたちとの関わりとは異なる。学校における子どもの理解やかかわり方、子どもの発達段階や個人差に対する理解がなければ適切な対応ができない。そのため、学生には保健室ボランティアでの子どもたちのかかわりは、これまでの経験をもとに対応できない難しさがあったと考えられる。このことは、【子どもへのタイミングの良いかかわりと対応する】や【総合的にとらえる視点を養う】などの課題にも関連し、子どもへの言葉かけに対する考え方にも影響もしている。このことから、保健室ボランティアは、学校教育の理解や教育観、発達過程にある子ども理解にもつながり、その中で果たす養護の意義や養護教諭の役割についても考えるきっかけとなっていた。学校における生徒指導（生活指導）に関しては、学校全体ですすめられる¹¹⁾ため、今後は授業科目の一部分に含めていくことを検討して

いく必要がある。

学生は保健室ボランティアでの学びを前期後期の講義あるいは後期の講義に活用しており、講義内容と関連付けていた。そのため、講義への役立ち観もあったと考える。保健室ボランティアでの経験と講義内容を関連させて自身の思考の中で考えることは、講義と実践との往還がなされているといえる。また、自分の課題と向き合いながら講義を受けて学んでいくプロセスは、自己の特徴や長所に気づき、さらに自己学習していくことにつながる。このようなことから学生は養護教諭観や子ども観といったものの考え方や見方を変化、発展させ、実践力を培っていくものと考えられる。

VI まとめ

保健室ボランティアに参加した養護教諭特別科の学生41名を対象に保健室ボランティアでの学びを分析した。

- 1 保健室ボランティアに参加して良かったととらえたものほど学びが多く、講義への役立ち観や講義内容との関連付けを行っていた。
- 2 保健室ボランティアは、子どもへの言葉かけ、養護教諭観、子ども観、保健室の在り方など、学生のもの考え方や見方に影響していた。保健室ボランティアに参加してとても良かったと捉えているものは良かったととらえているものに比べて養護教諭観に影響を与えていた。
- 3 保健室ボランティアをとおして87.8%の学生が自分自身の課題をとらえていた。その課題は【専門的知識や技術をつける】【子どもや職員とのコミュニケーション能力を養う】【子どもへのタイミングの良いかかわりと対応をする】【子どもに責任ある指導をする】【スピーディーに連携や協力を行う】【総合的にみる視点を養う】【豊かなアイデア力を持つ】【柔軟な考え方や視点を持つ】【行動力と体力をつける】であった。
- 4 保健室ボランティアでの学びを前期後期の講義あるいは後期の講義に活用しており、講義と実践との往還がなされていた。

Ⅶ 研究の限界性と今後の課題

本研究は対象者が42名と少ないため一般化するにはさらに継続的な研究を行い分析していく必要がある。また、本調査では、保健室ボランティア内容と学びの関連や保健室ボランティアを受け入れた学校の養護教諭を対象に調査を行っていないため、今後はこれらを含めて分析していく必要がある。

謝辞

調査にご協力くださいました養護教諭特別理科の皆様には感謝いたします。また、保健室ボランティアを快くお引き受けくださいました学校の校長をはじめ養護教諭、教職員の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 教育職員養成審議会：養成と採用・研修との連携の円滑化について（第3次答申）、2003
- 2) 中央教育審議会：子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取り組みを進めるための方策について（答申）、2008
- 3) 中央教育審議会：教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）、2012
- 4) 神原 咲子、神崎 初美、安達 和美 他：「まちの保健室」ボランティア看護師のスキルアップ・研修の評価と今後のニーズの検討、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要 16、111-119、2009
- 5) 森嶋 とみ子、田内 優子、田村 美千代 他：「まちの保健室」ボランティア活動による看護師の成長と活動継続への課題、日本看護学会論文集、地域看護 39、182-184、日本看護協会看護研修学校教育研究部 編、2008
- 6) 小泉由美、高山直子、橋本智江：学生が地域の高齢者ボランティアと1対1でフィジカルアセスメントを実施する演習体験を通しての学びの分析、日本老年看護学会誌 16 (2)、57-64、

2012

- 7) 進藤聡彦、勢田二郎、澤登義洋他：大学生の教育ボランティアが教育実践力の育成に及ぼす効果、教育実践学研究 14、139-151、2009
- 8) 時任隼平、久保田賢一：高等学校におけるティーチングアシスタント経験がもたらす教師の授業力量形成への影響とその要因、日本教育工学会論文誌 35、125-128、2011
- 9) 用語検討委員会：養護教諭の専門領域に関する用語の解説集〈第二版〉、日本養護教諭教育学会、2012
- 10) 後藤 多知子、萩原 琴弥、後藤 和史：養護教諭志望学生における養護教諭に対するイメージの変容、瀬木学園紀要、5、32-37、2011
- 11) 文部科学省：生徒指導提要、1-20、教育図書株式会社、2010